

## クライストの『決闘』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横谷, 文孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12167">http://hdl.handle.net/10291/12167</a>

# クライストの『決闘』について

横 谷 文 孝

物語りは、公爵暗殺事件と公位継承問題の紹介で始まり、やがて暗殺に使用された矢の所有者捜しと、嫌疑をかけられたヤーコブのアリバイ調査が行われる。そのため、読者はスリリングな犯罪小説とか推理小説を予想させられるが、法廷におけるヤーコブのアリバイ証言によって事態は一変し、物語りは、引合いに出されたリテガルデという一女性の身の潔白を賭けての決闘へと展開して行く。この神明裁判たる決闘の結果はヤーコブの勝利に終るが、やがて軽傷を負っただけの彼が重態に陥り、決闘相手の重傷を負ったフリードリヒは生命を蘇らせる。その間、再び推理小説のようにヤーコブのアリバイの洗い直しがなされ、それによって彼の思い違い（欺かれ）が発覚し、ヤーコブ自身によるアリバイ訂正証言と、暗殺の自白によって、神明裁判にどんでん返しをもたらされ、暗殺事件にも終止符が打たれる。このように、ヤーコブを中心とする推理小説もどきの事件の展開が、物語りの主要なる枠組を形成するのであるが、物語の焦点は、ヤーコブのアリバイに、と言うよりは、一女性の潔白を賭けての決闘、及びその決闘を巡る諸状況に絞られている。

決闘は、リテガルデの弁護人を引き受けたフリードリヒ・フォン・トロータ卿が、法廷で、ヤーコブ伯に関する名誉回復宣言書をあっという間に二つに引き裂き、自分の手袋と一緒にまるめてヤーコブの面上に叩きつけて、次のよう

に叫ぶことによって開始される。

「伯爵こそは破廉恥きわまる中傷者である。自分は神の御審判を願って全世界の前に、伯爵の負わせた罪がリテガルデの全く与り知るところでないということ<sup>(1)</sup>を、命にかけて証言しようとする者である。」と。

これは理屈を抜きにした、まさに問答無用の挑戦である。ここでフリードリヒは、何故ヤーコブが中傷者であるのかを論じていない。それは、フリードリヒが直接リテガルデ自身の口から彼女の潔白を言葉によって知らされていないからであり、自己の胸の中の確信のみに従って行動しているからである。フリードリヒが聞く耳を持たないわけではない。またリテガルデの方も言葉を出し惜しんだわけではない。フリードリヒが、聞くことを、それ故、語ってもらうことを望まなかったからであり、そうする必要を認めなかったからである。フリードリヒは、彼に救いの手を求めるリテガルデに向って言う。

「御自分の潔白を弁護したり証明したり、むだな言葉を費やすことはおやめなさい。どんな証言よりもずっと確かな力強い声が、この胸の中であなたのために弁じています。それは証言どころか、あなたがパーゼルの法廷で、諸種の事情や情勢から総合して示すことのできる法的根拠のすべてよりも、ずっと確かなものです。不当で狭量な御兄弟があなたを見捨てた以上、私を友とも兄弟とも思って下さい。そしてこの事件における弁護人としての名誉を与えて下さい。パーゼルの法廷で全世界の裁きを前にして、立派にあなたの婦徳の輝きを再びとり戻しましょう。」<sup>(2)</sup>

言葉は不要である、信頼さえあれば。それがフリードリヒの行き方である。それ故に、今度は彼の方が言葉による伝達を省略する。即ち、彼はリテガルデに彼の本音を漏らさない。彼女を信頼しているし、彼女から信頼されていると信じているから。

「そして三日目にフリードリヒ・フォン・トロータ卿は、彼が法廷でいかなる弁論を行おうとしているか、その形式と方法については一切語ることなく、大勢の騎馬兵や侍臣たちを引具して、パーゼルへの街道に姿を現わした。」<sup>(3)</sup>

この弁論の形式と方法が、ヤーコブへの問答無用の決闘宣告であった。自身

とリテガルデとの間の無条件の信頼関係に寄せるフリードリヒの絶対的確信、「胸の中の」「どんな証言よりもずっと確かな力強い声」がそうさせたのである。

「この小さい作品は、神学的暗示に満ち、そして、神という『全く別種の物』を相手とするとき、人間の精神が陥らずにはいない極度の苦境と途方にくれた状態を示している。」<sup>(4)</sup> 神明裁判は、決闘の場に、眼に見えぬ神を呼び出すことであり、神の摂理を仰ぐことにある。神の意向を問うからには、神の道に仕える者が立ち会うのが常道である筈なのだが、戦いが教会の前ではなくて城前広場で行われたり、司祭がこの場に居合わせないのは、1215年の会議以来、神の判決への司祭の参加が禁じられたという歴史的事実があるからであり、人間の公正さは、人間の規則と人間的にもたらされた証拠とによって導かれ、支持されるべきだという確信によるものであるらしい。<sup>(5)</sup> クライストのこの短篇においても、決闘に立ち会うのは皇帝である。皇帝は、決闘の結果を見届ける者たちの中で、いわば最高の地位を占めているが、神の代理人とみなすことは難しい。何故なら、皇帝も神意の在所を把握することができなかったからである。皇帝は、刑場にタンカで駆けつけたヤーコブの一声を聞いて、「死人のように蒼ざめて」立上るし、ヤーコブの自白を聞いて、「呆然として石像のように立ちつくし」<sup>(6)</sup> ている。「『神は真実で、誤ることがない!』」<sup>(7)</sup> そうだ、神はそう<sup>(8)</sup> だ。しかし、人間の了見が思いこんでいるような具合にそうなのではない。」<sup>(8)</sup> 皇帝が最後に、「聖なる神明決闘の法規の中の『罪ハコレニヨリ直チニ明カトナル』と前提されている個所には悉く」「『神ノ御心ナラバ』という文句をつけさせた」<sup>(9)</sup> ことも皇帝が神の代弁者となり得ていないことを、皇帝も人間であり、神意を測りかねて動揺することを証明している。

疑念にとらわれているフリードリヒの母、ヘーレナ夫人に向って、「私の良心は、罪に汚れてはおりません。たといあの方が鎧も兜もつけずに戦われても、きっと神様と天使たちがお護り下さいます。」<sup>(10)</sup> と宣言してみせたリテガルデは、決闘の結果を眼の当りに見て失神する。意識を回復してからも錯乱状態

に陥り、面会を求めたフリードリヒを拒絶し、「烙印を捺されました。永遠の罪人です。この世でもあの世でも、呪われた罪人なのです。」「神様は公明正大で、神様のなさることに間違はございません。いらして下さい。神経が狂い、精根がつき果てます。お願いですから一人で絶望のなかに泣かして置いて下さいまし。」<sup>(11)</sup>と叫んで、今度はフリードリヒを失神させる。彼女は判決を全面的に肯定し絶対視する。確信を打ち砕かれた彼女は、自己のあり得る筈のない罪を自己の胸に問いかけるべく強いられる。「内面の知識と外部から来る判断との間の争いの中で、彼女は、彼女の内面の確信を否定し、真実への洞察を否定する。」<sup>(12)</sup>

一方、フリードリヒは、母親との対話とリテガルデとの対話の中で、「さまざまな調子の人間的、<sup>(13)</sup> 神的可能性に沿って動<sup>(14)</sup>き、「振子運動<sup>(14)</sup>」をしながら、「決闘の意味を求めての戦い<sup>(15)</sup>」を行う。

神の判決を解明できるような人間はいないのだ、戦いに敗れてもこうして生き返っている、敗れたのは忌むべき偶然のおかげでしかない、「決闘というのは、一旦審判官の宣告で勝負がきまれば、神の法廷の柵の中では二度と同じ争いのために行われはしない」という掟は、人間の勝手に作ったもので、構うことはない、今は御託宣が偏狭に、目先だけに解釈されているが、本当の神意は全然別であるということ、もう一度剣によって証明できるのだ。<sup>(16)</sup>母親との対話の中でフリードリヒはこう宣言し、「彼自身の人間の意志の力と行為の力を信用する。」<sup>(17)</sup>フリードリヒの思想には、掟の束縛からの解放を日ごと進取の精神と、神の摂理に対する疑問の提出という、いわば革新的なものが窺われる一方、神を人間の領域に引きずり下ろそうとする思い上がりと樂觀主義が支配している。彼は、戦いに敗れたという厳然たる事実の重みに気づいていない。「お前が気にかける必要がないといっているこの掟こそ絶対無上のものなのですよ。この掟は納得がいこうはいくまいが、神様の御命令を実地に移して、おまえとあの女を、憎むべき罪人同様、むごたらしい処刑の手に任せるのです。」<sup>(18)</sup>という母親の言葉によって、ようやく彼は自己中心的な夢から目覚め、リテガルデの身の上の配慮に向っている。

次いで、リテガルデに面会を求めて激しく拒絶されるフリードリヒは、ここでもまだ自己の思い上がりに気づかず、自分と彼女は相変らず信頼の絆で結ばれていると妄想している。自己の罪を認め、神の公明正大さを強調するリテガルデの投げやりな、絶望的な発言に気絶した彼は、ようやく二人の信頼の破綻と自己確信の崩壊を認識することになる。言葉を欠いたところで成立していたかに見える二人の信頼は、ここで試練を受ける。決闘に敗れ、死を直前に控えて、両者は生の感情をぶつけ合う機会に恵まれる。フリードリヒを失神に追いやったリテガルデは、ヘーレナ夫人の非難に対して、自己の潔白を今度はしかと、言葉によって表明してみせる。「……(略)……二度とふたたび伯爵の城へは足を踏み入れまいと固く決心して父の城へ帰ってまいりました。これが唯一の関係なのですわ。」「もしも私が今までにあの下賤で卑劣な男と何等かの関係があったとするならば、<sup>(19)</sup> 不覚にもフリードリヒは、このリテガルデの表明を聞いてはじめて彼女の潔白を信ずることができる。「何ですって。」「今のお言葉は私の耳にまるで音楽のようでした。もう一度くりかえして下さい。」「では、あのならず者のために私を裏切ったわけではなかったのですね。伯爵が法廷であなたに負わせた罪には、全然覚えがないのですね。」「おお全能の神よ。」「ありがとうございます。あなたの言葉で私は生き返った。もう私は死をも恐れはしない。今の今まで果てしない苦難の海のように拡がっていた未来は、再び数千の太陽の輝く世界のように私の前に立帰ってくる。』<sup>(20)</sup>

いかにも芝居がかった大仰な科白が続いているが、極端から極端へと上下運動を行い、喜怒哀楽を過剰なほど露呈するクライスト的人物の典型をフリードリヒの中に見ることができる。

こうして言葉による確かめ合いによって再びリテガルデに対する信頼を回復した彼は、リテガルデとともに、改めて神の裁きに身を委ねようという意志を披瀝する。

「おお私の大切なリテガルデ。」「やけになって取乱さないで下さい。あなたの胸の中に生きている感情を岩のように積み重ねてそれによりかかり、たとい天と地が頭の上や足の下で崩れようとも、決してたじろがないでいらっしや

い。心を惑わせる二つの考えのうち、よく腑におち、納得のいく方にたよることにはしましょう。あなたに罪があるなどと思いこむよりも、あなたのために戦った決闘で私が勝利を占めたのだと信じようではありませんか、おお神よ、私の命の支配者よ。」「私の魂をも混乱から救いたまえ。いったん敵の土足の下に身を屈しながら、ふたたび生返った以上、決して敵の剣に征服されたのではないと私は考えるのです。全智全能の神が、敬虔な信頼の念をもって縋られた時に、真実を啓示して裁きを下すべきその責任は、いったいどこへ行ったのであろう。おおりテガルデよ。」「生きているうちは遙かに死を望み、死にあたっては永遠を望み見て、確固不動の信仰を持ちつづけましょう。あなたの潔白は太陽の燦然たる光のもとに明らかにされるでしょう。しかもあなたのために私が戦ったあの決闘の結果によって。<sup>(21)</sup>」

自己の正しさに対する自信と、或いは可能かも知れぬ自己の誤謬に対する不安とが綯い交ぜになって示されているが、彼の魂は、ここでは既に神に向けられている。自分は間違っているだろうか。いや正しい筈だ。神が真実を啓示してくれるように、という彼の神への切なる願いと問いかけをみることが出来る。先に母親との対話の中で人間の作った掟を無視したようなあの思い上がりは影を潜め、自己の確信に裏打ちされた神への呼びかけと、敬虔さに伴われた「確固不動の信仰」を、さらに、この信仰に支えられた来世への期待、神への帰依をみることが出来る。

周知の通り、クライストの作品の中で、掟の問題を前面に掲げたものとして、『ペンテジレーア』と『公子ホンブルク』の二つの戯曲がある。『ペンテジレーア』では、生け捕りにした男に愛情を抱いてはならないという掟が国是として設定されており、軍人を扱った『公子ホンブルク』では、軍律が絶対的な掟として据えられている。ペンテジレーアは、アヒレスという愛の対象を得て、その愛に賭けることによって、ほとんど意識的に掟を犯し、その結果、自らの手で愛を失い、自国を崩壊させ、自分自身をも抹殺しなければならない運命に陥っている。軍律を犯した廉で死刑を宣告されたホンブルクは、死をひた

すら恐れ、自分の死体が埋められる筈の墓穴を見て、途端に生きることのみを願ひ、幸福への一切の権利を放棄する。死を恐れる軍人を描いたという点でこの戯曲はその近代性を評価されているが、ホンブルクは軍律に対して批判の目を向けてはいない。掟そのものに質的な差異がありすぎるので、つまり、ペンテジレーアを女王とするアマツォーネ国の法制度が、あまりにも時代錯誤的であり、虚構性が強すぎるのに対して、一方の軍律が常識に耐えうるものであるので、両戯曲を同じ平面で論ずることは妥当とはいえないが、両戯曲における主人公の掟に対する意識のあらわれ方には、かなりの距離が見られる。ペンテジレーアがその強烈な個性をもって自己を制約する掟を打ち破ってしまうのに対して、ホンブルクは、軍律という掟に反抗しようと意図したり、悩んだりすることはない。そもそも掟の存在を意識していたかどうかさえ疑わしい。つねに戦いの場で生き抜いて行かなければならない両者が、当事者にとって最も肝要な掟を、一方は自己の血肉として体内に刻み込んでいるのに対して、もう一方は意識の網目から完全にすべり落している。この意識の顕著な差が、そのまま作品の結末に投影されることになる。ホンブルクの夢遊病的な性格と、ペンテジレーアの激情的な性格が、共に掟を踏みはずさせたという点で類似性は見られるものの、死刑宣告という絶望状態に陥れられてはじめて掟の存在を認識するホンブルクと、国是という厳然たる事実を熟知しながら、敢えて、愛故に、掟破りという所業に出ざるを得なかったペンテジレーアとでは、人間像の上でかなりの差異がみられる。

この二つの戯曲と比較した場合、『決闘』は、質的にも量的にも問題性が薄い。しかし、フリードリヒが掟の持つ意味を問うという点で、即ち、掟は人間が作り出したものにすぎないと解釈する点で、彼はペンテジレーアに近い存在であり、一方、フリードリヒが、決闘という最終的手段に訴えながら、その結果によって引き起こされた影響を十分認識せず、母親の言によってはじめて掟の持つ重みを認識しているという点で、彼はホンブルクに近い人間であるといえる。フリードリヒとホンブルクはそもそも掟の問題に大して顧慮を払わない人間であり、苦境に陥ってようやく掟の存在に気づくタイプの人間



である。遅ればせながらも掟の存在を認識した後で、自己を空しくして、その掟の意味する所に従おうとした時に、救いの手がさしのべられるという点でも両者は共通している。それは無知故の、或いは無意識故の勝利であり、『ペンテジレーア』の場合は、ペンテジレーアの意識がもたらす悲劇ということもできる。

人間の作った掟に対して反抗し、その掟を無視しようとさえ意図したフリードリヒが、リテガルデへの信頼と自己の確信とを回復して、神の啓示を希求しつつ従容として神の懐に立ち帰ろうとすることは、彼が既に掟をのり越えたことを意味するものであり、掟を拒否することなく、神の啓示を確信しながら死を受け入れようとする積極的な人間に生れ変わっていることを意味するものであろう。同じ事件のために二度と行われることはないという掟に規制された決闘に敗れたからには、掟に触れることなく、すべてを神の裁きに委ねることが人間の選ぶ道であるという思想が根底に横たわっているようにみえる。クライストは生涯を通じて、「自然の法、掟に反くものには、必ず酬があり処罰を受ける」という信念を抱いていた。<sup>(22)</sup>『決闘』における掟の問題は、二つの戯曲に比べるとそれほど意味を持ち得ないけれども、クライストという人間の資質を問う上では、軽視できないものがある。

クライストの短篇は、人間が激しい衝撃に見舞われた時、あるいは極限状態に追い込まれた時、どのような反応を示し、どのような態度に出るかを扱っている点で共通している。『O爵夫人』では、一女性の身に覚えのない懐妊という、わかってみれば何の不思議もない、それでいて本人にとっては救いのような事態を描き、『チリの地震』では、文字通り地震の中で人々がどのような境遇に陥るかを描写し、『聖ドミンゴ島の婚約』では、黒人と白人の戦いの中で、黒人の少女と白人の青年との愛の可能性を問い、『ロカルノの乞食女』では、幽霊という異界の存在と現世の人間との対立を描き、『拾い子』では、色情に狂う養子と育ての親の破滅を扱い、『聖ツェツィーリエ』では、教会音楽の力、というよりは神の威力に打ちのめされる4人の若者を扱い、そして『決闘』

では、神の意向の在所を測りかねる人間の混乱を扱っている。

こうした極限状態における人間描写を手がけた7篇の短篇の中で、男女の愛をテーマにしていないという点で『ロカルノの乞食女』と『聖ツェツィーリエ』が挙げられ、さらに男女のカップルが登場しないという点で『聖ツェツィーリエ』が挙げられる。未亡人を登場させているという点では、『O侯爵夫人』と『決闘』が共通し、若い相愛のカップルを扱った点では、『チリの地震』と『聖ドミンゴ島の婚約』が共通している。また、主人公の急死という点からみると、『チリの地震』、『聖ドミンゴ島の婚約』、『ロカルノの乞食女』、『拾い子』の主人公がすべて死を免れることができないのに対し、『O侯爵夫人』と『決闘』における主人公とその相手は、生命の危険に曝されながらも死を免れている。失神またはそれに近い状態に追い込まれるという点からすると、『聖ドミンゴ島の婚約』、『ロカルノの乞食女』、『聖ツェツィーリエ』の主人公が気絶していないのに対し、残りの4篇では主人公がいともたやすく卒倒している。この失神という症状はクライストの作品にしばしば登場するきわめて特異な現象であり、この現象についてのみ論ずることさえ可能かつ必要な問題であるのだが、失神を起こさない主人公またはその相手は、狂乱あるいはそれに近い状態を経験している。今ここで多言を労するつもりはないが、失神と狂乱状態は表裏の関係にあるといえる。さらに信頼という問題からみると、男女二人のカップルが登場する『O侯爵夫人』、『聖ドミンゴ島の婚約』、『決闘』が係わりをもってくる。見誤りと言葉不足によって信頼関係に破綻をきたしたことにより、『聖ドミンゴ島の婚約』の二人は悲劇を迎え、危ういところで信頼関係を回復した『O侯爵夫人』と『決闘』におけるそれぞれのカップルは、文字通りハッピーエンドを迎えることができる。

このように概観してみると、クライストの7篇の短篇の中で、『O侯爵夫人』と『決闘』に多くの共通性がみられることがわかる。共に「犯人」捜しを企てており、推理的要素あるいは謎解きの要素を有している点でも類似性を窺わせる。しかし、両作品における女性、即ちO侯爵夫人とリテガルデの行動方法にはかなりの違いが見られる。Hoverland は、リテガルデが自分を中心事件の下

位に置き、内面の確信を事件の見かけの意味の下位に置き、彼女自身の存在に対する関連を失い、妄想に近づくのに対し、侯爵夫人は決定的な事件を無視し、自ら作り上げた確信に頼っている。また、リテガルデが偽りめいたものを真実だとみなすのに対して、侯爵夫人は事実と逆らっている、と述べている。<sup>(23)</sup>これは確信の問題を重視した見方であるが、信頼と言葉の点から見ると、さらにここに、『聖ドミンゴ島の婚約』におけるトーニーをも引き合いに出すことが許されるだろう。何故なら、彼女はリテガルデやO侯爵夫人よりもはるかに機転のきく健気な女性なのであるが、言葉による意志の疎通を欠いたために両未亡人と同じ混乱に陥るからである。結果の是非の分れ目は、この言葉による伝達の完了如何に係わっている。リテガルデとO侯爵夫人にとって幸運だったことは、極限状態の中で対話をする可能性が与えられたことである。逆にその可能性を奪われたトーニーの悲劇性が一層強調されることになる。

さらに Hoverland は、フリードリヒを『拾い子』のエルヴィーレと比較する試みを行っている。彼は、エルヴィーレが完全に理想像に身を捧げていて、現実に対して心を開くことができないのに対し、フリードリヒは引き起こされた事件との絶えざる対決の中で、つねに新しい態度と思考の手がかりを工作している、と述べている。<sup>(24)</sup>これは、意外な、そして指摘されてみれば首肯できる興味深い見方であるが、さらにここに、再び信頼と言葉の問題で、『O侯爵夫人』のF.伯爵と『シュロップフェンシュタイン家』のジルヴェスターを挙げることができるだろう。つまり、フリードリヒと思い上がりの強いF.伯爵は、言葉による伝達を欠く間は信頼を取り戻すことができないという点で同一線上に位置しているし、理想主義的で、相手をよりよく理解しようという柔軟性をもつ点で、フリードリヒとジルヴェスターは同質的人間であるといえるからである。

既述したように、『決闘』は男女二人の信頼関係に焦点が絞られている。信頼関係は無論言葉のやりとりが存在しなければ成立し得ない。クライストがこのような信頼関係を前面に据えるということは、彼の言語に対する不信の念を

あらわすものであり、対話を欠いたところでも信頼関係が成立することを、つまり絶対的信頼を望んでいる姿勢のあらわれでもある。信頼と不信、ないしは誤解とは、まさに紙一重のところであつてつながっている。言語を欠いたところでの信頼関係は殊にそうである。この見せかけの信頼が危機に曝されたときはどうなるか。言語による保証がないだけに大混乱に陥るのは目に見えている。信頼関係が言葉を欠いたところでも成立するならば、それに越したことはない。しかし言葉が意志疎通の最高手段である限り、言葉の出し惜しみは、誤解と不信に通ずる危険性を生み出すものでしかない。それがいかに内容の乏しい言葉であっても、言葉は言葉である。たった一言の初歩的な伝達を欠いたために未曾有の不幸に陥る例を、クライストは執拗に描いてみせている。『決闘』はこのようなクライストの言語観を裏返しにしてみせた作品であるということが出来るだろう。

(引用の訳文には、『O侯爵夫人他六篇』 相良守峯訳 岩波文庫 昭和26年を利用させていただいた。)

#### 参 考 文 献

- [A] Heinrich von Kleist Sämtliche Werke und Briefe Bd. II hrsg. v. Helmut Sembdner Carl Hanser Verlag München 1965.
- [B] 『トーマス・マン全集』IX 評論 1 新潮社 1972. のうち『ハインリヒ・フォン・クライストとその小説』 手塚富雄訳。
- [C] Lilian Hoverland: Heinrich von Kleist und das Prinzip der Gestaltung Scriptor Verlag 1978.
- [D] 『クライスト その生涯と作品』 福迫佑治著 三修社 1978.

#### 〔注〕

- (1) [A] (参考文献の[A]を示す。以下これに従う。) S. 242.
- (2) [A] S. 240.
- (3) [A] S. 241.
- (4) [B] S. 631.
- (5) [C] S. 205.
- (6) [A] S. 259.
- (7) [A] S. 259.

- (8) [B] S. 631.
- (9) [A] S. 261.
- (10) [A] S. 245.
- (11) [A] S. 251.
- (12) [C] S. 210.
- (13) [C] S. 208.
- (14) [C] S. 210.
- (15) [C] S. 209.
- (16) [A] S. 248~249.
- (17) [C] S. 207.
- (18) [A] S. 249.
- (19) [A] S. 252~253.
- (20) [A] S. 253.
- (21) [A] S. 253~254.
- (22) [D] S. 334.
- (23) [C] S. 210.
- (24) [C] S. 209.